



魂譲りについて

「魂譲り」は活水で学ぶ者一人ひとりが「活ける水」を汲みとり、その「活ける水」を周囲の人々に与える者になって欲しいという創設者エリザベス・ラッセル先生の願いが手桶(たおけ)によって象徴されています。「活ける水」を充たした手桶には、その年の卒業生一同の思いや願いが2色のリボンに託して結び加えられ、毎年、卒業生から在校生・在学生へと譲り渡されます。



活水スピリット

オランダ坂を踏みしめて正門の石段をのぼりきると、赤い屋根が見えてきます。大きな楠の木に沿って石畳の路を抜け、本館の玄関あたりまで来ると、どこからともなくパイプオルガンの音色が聞こえてくることがあり、活水らしい空気が流れていることを実感します。

卒業生と再会して学生時代の思い出話になると、多くの方がチャペルアワー(礼拝)のことを懐かしく話してくれます。伝統が息づくチャペルでパイプオルガンの演奏に癒やされた経験。何気なく歌った鼻歌が讃美歌だったこと。今も覚えている聖書の言葉や心に響いたメッセージetc。それらが、学生時代の喜怒哀楽に満ちた体験と深



く結びついていたことを知らされ、驚かされることがあります。時の流れとともに知識は薄れたとしても、心に深く刻まれて残るもの。それは人生を豊かに彩る宝物といえるのではないのでしょうか。

創立者であるエリザベス・ラッセル先生は「活水は祈りの子です」と教えられました。活水が多くのの方々の祈りによって生まれた学校であることを感謝するとともに、隣人のために祈りをもって奉仕する女性となってほしいという願いが込められていると思います。卒業生が「愛と奉仕の活水精神」と口にするたびに、「活水スピリット」が息づいているを感じ、そして、とても誇らしい気持ちになるのです。

学院宗教学主任 二瓶浄幸



卒業式の風景

